

一昨年11月に、大阪市立大学大学院文学研究科は、「文学部の逆襲——漂流する現代を生きのびるためのガクモン」を、梅田グランフロントで開催した。これは、当時話題の「文系不要論」のからみで、朝日、讀賣などが報道してくれ、当初目標のひとつである一般向けの集客面は弱かったものの、広報面、とりわけ大学内部へのインパクトとしては、一定の成果をおさめた。また、院生を中心とする若手研究者たちにとって、一般向け発表の経験も、貴重な学びの機会となっているとの結論を得た。

この取り組みは、秋の大学院入試説明会と市大授業を包含したものであったが、その後の総括により、各専修が個別に説明をおこなうような従来の大学院入試説明会は、この時期にも必ずおこなうべきであろうとの結論がくだされ、またおおきなイベントを毎年おこなっても、インパクトは薄れるであろうとの判断から、今年度は、①従来の大学院入試説明会を開催する、②全専修の院生を中心とする若手研究者に一般向け発表をさせることで、受験希望者に文学研究科の知の全容を提示する機会をもうける、という2点を目的としたイベントを開催することとなった。

このコンセプトから、筆者の出した企画が、「大学院研究フォーラム」である。これは、かつて教育促進支援機構の研究支援チームがおこなっていた、複数の専修の院生が、みずからの研究内容を発表し、交流する「院生研究フォーラム」にヒントを得たものであった。そこで、全専修に発表希望者をつのり、応募してきた院生・若手研究者をあつめ、拡大WGを2回開催、みな意見により、企画をつくりあげることとした。

募集の結果、14専修・専攻から、17名の院生・若手研究者があつまり（残念ながら全専修ではなかったが）、具体的な発表方法、キャッチコピー、ポスター案などが、発表者たち自身により提案され、採用された。

かくして、2017年11月26日(日)、高原記念館学友ホールにて、「大学院入試説明会&大学院研究フォーラム」が開催される。キャッチコピーは心理学の院生が考えた「文学部 開放」。第1部が大学院研究フォーラムであり、引き続き、第2部の大学院入試説明会に接続する構成となっていた。第1部は、たんなる研究発表会にとどまらず、院生・若手研究者が、みずからの研究を、他者に向けてわかりやすく報告、交流する場でもあり、大学院受験に関心のある層のみならず、12月にコース志望届をだす1回生にも、文学研究科・文学部の各コース・専修の学びを知ってもらい、コース決定の参考とする機会とすることも期待されていた。時間的制約から、5名が口頭発表、のこりがポスター発表で、ひとりあたり時間も短かったが、結果的に、受験希望者や在学院生、教員たちが参加し、専修を越えた質疑応答が生まれ、発表者には貴重な学びの機会となったと思われる。まことに残念なことに、宣伝にもかかわらず1回生の来場者は1名にとどまった（裏で教育促進支援機構企画のミーティングが開催されていたり……）。9月のコースガイダンス時に、教務委員長として宣伝したにもかかわらず、その価値をつたえきれなかったことを恥じいるしだいである。

とはいえ、今回のことにより、「みずからの手で作る」「文学研究科の広報となる」「一般の方にも理解してもらえる知の博覧会」という企画の重要さは、あらためて確認できたのであり、このような試みが継続されること、そしてなにより、積極的に企画に参加、来場する人びとが増えることを願ってやまない。

